

清流

題字：芳野 充

令和4年1月30日
第61号

発行所 加来不動産(株)
発行者 加来 寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

「努力」という種をまく

今月ご紹介させていただく「二十の徳目」は、十八番目の「努力」です。「努力」とは、適正（適当で正しい）な目標を立て、それを達成するまで行動しつづけること、です。この「努力」は二十の徳目のなかで、わたしが自信をもって「これはできている」と言える徳目です。

適正な目標とは、自分の境遇と適性（適した性質）を知り、それに見合った目標を立てることです。逆を言えば、自分の境遇や適性や実力もわかっている無茶な目標を立てたとしても、それは適正な目標といえず、また正しい努力には至らない、ということ、です。二十代後半のころのわたしが正にそうでした。

当時はわたしをふくめスタッフ五名体制。不動産という仕事もろくに理解していないにも関わらず、わたしは自分の年収を数千万円に目標設定し、三年後に飲食店をオープンさせる、などとうそぶいていました。

結果どうなったか。家族やスタッフとの人間関係は悪化し、家庭では妻と顔を合わせれば険悪な雰囲気になり、会社では始業時間がすぎて誰も出社しない、連絡もないというひどいあり様になりました。今考えると、自分のことすらまったく理解できていないのに、他人を理解しマネジメントできるはずがありません。当然の結果だと反省しております。

思い返せばわたしにとってツラく苦しい境遇を、「わたしに原因がある」と認め反省してから、ようやく正しい努力のスタートが切れたように思います。とは言え当初は、つい自分の実力以上のことをしようとしては断念し、自己嫌悪におちいるという負のサイクルも味わいました。ですが時間の経過とともに実力がないことを受け入れ、目標設定を少しがんばればできるラインまで引き下げ、コツコツと努力をつづけてきました。今月で四十五歳になりますが、ようやく自分にも他人にも「正しい努力ができるようになりました」と、言える気がしています。

素心学塾塾長である池田繁美先生は、「努力は種をまくことと同じです。種をまくからやがて発芽し、花が咲き、実を結ぶのです。種をまかなければ、花が咲くことも、実を結ぶこともありません。自然の摂理です」とおっしゃいます。

味わい深い人生を送るためにも、「努力」という種をまく。そのためには、自分の境遇と適性を知り、それに見合った目標を掲げる。そしてまじめにコツコツ努力していくことが大切だ、と実体験をとおして感じます。

加来 寛

